

仏文が若かったころ ～辰野隆と黄金期フランス文学科

修士二年 坂爪 彬

いつか日本一の小説家になることが、仏文在籍中の太宰治の夢だった。昭和五年（1930年）に旧制弘前高校を卒業して東大仏文科に進んだ太宰治こと津島修治は、左翼運動と女性関係、創作行為にのめりこんで大学にはほとんど姿を現さない。珍しく登校した試験の日の出来事が、処女作品集『晩年』に収められた「逆行」の中に描かれている。

やがて、あから顔の教授が、ふくらんだ鞆をぶらさげてあたふたと試験場へ駆け込んで来た。この男は、日本一のフランス文学者である。われは、きょうはじめて、この男を見た。なかなかの柄であって、われは彼の眉間の皺に不覚ながら威圧を感じた。この男の弟子には、日本一の詩人と日本一の評論家がいるそう。日本一の小説家、われはそれを思い、ひそかに頬をほてらせた。教授がボオルドに問題を書きながらいる間に、われの背後の大学生たちは、学問の話ではなく、たいてい満州の景気の話で囁き合っているのである。ボオルドには、フランス語が五、六行。教授は教壇の脇掛椅子にだらしなく坐り、さもさも不機嫌そうに言い放った。

——こんな問題じゃ落第したくてもできめえ。

ここで言われている「日本一の詩人」とは三好達治のことで、「日本一の評論家」が小林秀雄である。二人は大正十四年（1925年）に仏文科に入学し、昭和三年（1928年）に卒業した同級生だった。ちょうど太宰が入学する頃、三好達治は新しい抒情の開拓者として詩壇にデビューし、小林秀雄は新進気鋭の評論家として頭角を現していた。

もう一人の日本一、太宰による「日本一のフランス文学者」とは、東大仏文科の立役者であり、名物教官として知られる辰野隆である。後に太宰は、上京してからの生活を回顧して綴った短編『東京八景』に、こう記している。

私は昭和五年に弘前の高等学校を卒業し、東京帝大の仏蘭西文科に入学した。仏蘭西語を一語も解し得なかったけれども、それでも仏蘭西文学の講義を聞いたかった。辰野隆先生を、ぼんやり畏敬していた。

太宰は辰野に憧れて仏文科に進学した。とすると、少なくとも昭和のはじめの段階で、仏文学者辰野隆の名前は青森の文学青年のもとにまで知れわたっていたことになる。辰野が東大文学部の助教授に就任したのは大正十年（1921年）のことで、二年間の留学を

経て日本人ではじめてフランス文学の講義を持つようになったのが大正十三年（1923年）である。この前後から辰野は随筆や評論、翻訳を数多く発表しはじめており、とりわけ大正十一年に刊行した『信天翁の眼玉』は、フランス文学の魅力を軽妙に紹介した名エッセイとして知られている。太宰もまた、そうしたものを通じて辰野への「畏敬」の念を抱いたのだろうか。

大正の終わり頃から辰野が育てはじめた「東大仏文ブランド」は、小林秀雄や三好達治らを門下に輩出することで決定的な地位を確保し、さらに太宰その人をも含むあまたの文学者たちに支えられ、一種の神話と化して後の世の文学青年たちに大きな影響を及ぼすことになる。

*

辰野が助教授に就任する前年、一人のフランス人教師が東大を退官した。暁星中学の三代目校長に就くために辞職したエミール・エックである。カトリック修道会の一つ、マリア会に属する神父であった彼こそ、東大仏文科の創始者に他ならない。（鈴木信太郎『記憶の蜃気楼』による。ただし、『東京帝国大学五十年史』によると、帝国大学の文学部に仏蘭西文学科が増設されたのは明治二十二年のことで、これはエックが来日する二年前のことである。この頃のフランス人教師は「ビエール・グザヴィエー・ムガブール」なる人物だったようだが、仏文との関係はわからない。帝国大学は明治三十年に東京帝国大学と改称、明治三十七年からは分科制が施行され、仏蘭西文学科は文科大学内の文学科に組織される。分科制が学部制に変わるのは大正八年のことだ。一般によく知られる文学部仏蘭西文学科はこの結果成立したもので、大正六年の大学令および大正七年二月の帝国大学令改正に基づくこの体制が敗戦まで続く。制度面の事情も含めて、初期の仏文については十分に調べきれないまま原稿の締め切りを迎えてしまった。この冊子を再版する折があれば、調査に基づいてもう少し確かな記述を載せたい。）

エミール・エックは、1891年に来日して東大で教えはじめた。翌1892年にフランス語学文学の講義を開設し、1921年まで授業を受け持った。この間に仏文学専修生として卒業した者の数はわずかに二十二人で、卒業生のいない年が十五回あったという。（鈴木信太郎の前掲書による。鈴木は同書の別の箇所、卒業生数を「二十一人」とも記している。）仏文科への進学者数が増えたのは戦後に入ってからのもので、戦前でも第一次世界大戦以前にはフランス文学を学ぶ者など皆無に等しかった。

辰野隆は今の法学部にあたる法科大学を五年かけて卒業した後、大正二年（1913年）に文科大学に入りなおして仏文学を専修した。辰野が入学した当時、文科大学は三年制であったが、仏文の学生は三年生がゼロ、二年生が二人（このうちの一人が『レ・ミゼラブル』の訳者で知られる豊島与志雄）、一年生は辰野だけだった。同級生がいないのだから、当然、授業には一人で受けることになる。この頃のことを、辰野は次のように回顧してい

る。

僕が法科を出て仏文科に行った時、これは僕の恩師ですがフランス人のエミール・エックという先生がおりまして、この先生に三年間つきましたが、非常に可愛がられました。その時にはじめて、小学校でも、中学校でも、高等学校でもいわれたことのない「お前は勉強家だ」といわれました。「お前はエネルジックマンに勉強する」という言葉でした。しかし「お前は頭がいい」ということは一遍もいわれませんでしたよ。当然のことですがね。

とにかく、一番で卒業しました。というのは二番がない。仏文の学生は僕のクラスは僕一人だったんですからね……。ところが一人というのが実に都合が悪い。夏なんか眠くなった日にはどうしようもない。先生一人、弟子一人では眠れませんよ。そこで眠くなるのを防ぐ方法を発明した。一分間ぐらい息を止めている。すると苦しくなってきたハッと目がさめる。それを四、五遍やると、どうか、こうか目がさめてくる。息を止めていると僕の顔が真っ赤になる。エック先生が僕の顔が赤いので心配して「どうしたのかね」ときく。「ハイ、なんでもありません」と答える。そのうちにまた眠くなると、また息を止める。これは眠りを防ぐのに実にいい方法です。当時、仏文の先生としてはエック先生一人で、他の英語とか哲学概論といったような講義は共同講義で、英語は鈴木大拙先生に教わりましたが、淡々として滋味の豊かな講義でした。また、哲学概論をケーベル先生にならいましたが、この先生も風格のある、香り豊かな先生でしたね。

(辰野隆「我が師我が友」)

大正五年（1916年）に辰野が卒業すると、入れ替わるようにして鈴木信太郎が入学する。後にマラルメ研究の泰斗として日本のフランス文学研究を先導する鈴木は、辰野と共に東大仏文科の基盤を築いた人物でもある。鈴木信太郎が入学した年は、新生が他に三人いて、記録破りの大入りと言われた。一年生の鈴木は、同級生で後に劇作家・演出家として日本の新劇運動を引っ張る岸田国士と共に午前中はエックの授業を受け、午後は大学近くの青木堂二階の喫茶室でコーヒーを飲んだり、ビリヤード場へ遊びにいったりした。二年生になると、他の三人が学校に来なくなり、エックとの一対一での授業が多くなる。鈴木は当時の思い出をこう記す。

差し向かいの講義はなかなかつらかった。先生は九段の暁星から人力車に乗って、必ず定刻にはやって来る。丈は五尺そこそこだが麦酒樽のように重く肥って、大学目ぐすりの広告そっくりの雄大な髯を生やして、黒いやや角ばった大きな山高帽を冠っている。研究室に入って来ると、時には帽子を脱ぐのも忘れて滔々と喋り出す。相手が一人であってもわるびれない。だから居睡りなど到底出来ない。それに風邪を引い

たり、怠けなくなったりして、休む時には、前以て暁星へ電話を掛けねばならぬ。従って電話で頭が痛いなどと嘘をつくのは、休むより却って億劫になる。うまく出来ている制度である。

その代わり午後には全く解放される。他の先生の講義は殆ど聴かないからである。出席した講義は、大塚保治先生の「唯美主義思潮」と、松浦一先生の「生命の文学」ぐらいのものである。大体その頃の先生は、試験の際に、講義と関係のある本さえ熟読してゆけば、少し先生の説と異っていることを書いても鷹揚に通してくれたし、先生が学生を及第させる善意あることは初めからよく知っていたから、安心して自分勝手な勉強をすることが出来た。そこで午後は、辰野や岸田と玉突に入浸ったり、後年の若い地震研究所長の石本巳四雄と謡や仕舞や能の稽古に出掛けたり、山田珠樹や団伊能や久能木慎治などと遊び廻ったり、まことに呑気な学生生活だった。そして辰野と共訳の『シラノ・ド・ベルジュラック』は、この頃、二年位かかって仕上げた。

(鈴木信太郎「仏文事始」)

鈴木信太郎はエミール・エックの最後の教え子だった。鈴木が卒業した二年後にエックは退官し、後を継いでアンリ・アンベルクロードが着任する。エックと同じく、彼もまたマリア会の神父で、暁星中学の教師をしていた。辰野がこの年にフランスへ留学したので、帰国するまでの二年間は、アンベルクロードが一人で仏文の講義を担当した。この時の学生の一人が、大江健三郎の師として知られる後の仏文科教授渡辺一夫である。暁星中学、旧制一高においてもアンベルクロードの授業を受けていた渡辺は、恩師について詳細な一文を残しているが、とりわけ仏文での授業態度には深い感銘を受けたようだった。作文に対する丁寧な添削と、毎授業ごとに配布されるガリ版印刷の講義要約には、神父であったアンベルクロードの誠実な人柄がよく現れていた。

現在、昔アンベルクロード先生に教えていただいた連中のなかには、かなり多くの教員がいるわけだが、あのプリントのことを思うと、全く肅然たらざるを得まい。あれだけの献身をし通せる先生というものは、恐らく少いであろう。そして、教育法の変化ということは別問題とすれば、現在、日本におられる外人教師のうち、アンベルクロード先生のように週に平均三、四枚のガリ版を自ら切るだけの意志のある人々は、ほとんど皆無ではないかと思われる。

(渡辺一夫「アンリ・アンベルクロード先生のこと」)

渡辺一夫が仏文の二年生になった年に、すでに助教授になっていた辰野が留学から帰ってくる。帰朝後最初の講義であった『十九世紀文学思潮』は、その後も長らく続けられ、辰野の名講義として名高い。演習の授業では、ブルジェの『弟子』やリラダンの『残酷物語』を扱い、達意の訳を披露した。講義が終わると、学生たちは辰野を連れて青木堂へ

行ってコーヒーを飲んだ。

丁度、先生が新鮮な文体と豊かな味わいを持った論攻や随筆を発表し始めて居られた頃だったので、我々は学生の特権を大いに濫用して、先生がまだ筆にされないでいる新智識を、あわよくば引き出そうとしたわけだし、更に、あの様にシックな文章を書かれる方法なり秘密なりを教えていただこうなどと、大胆不敵なことをも考えていたわけである。

(渡辺一夫「辰野隆先生のこと」)

この頃、鈴木信太郎もまた講師として仏文研究室に出入りしていた。当時の鈴木は、水浅黄色の紋付きの羽織袴といういでたちで、唇の下にはちよび髭をはやして、それが「実にいきな感じだった」(渡辺一夫「鈴木信太郎先生のこと」)。このちよび髭は、ユイスマンス『さかしま』のデ・ゼッサントやブルースト『失われた時を求めて』のシャルリュス男爵のモデルとして知られるベル・エボックの名高いダンディー、ロベール・ド・モンテスキューを意識したものだったそうだ。

大正十二年(1923年)九月、関東大震災により東大も大きな被害を受ける。仏文研究室は焼け落ちた。それまでの研究室は、正門から右手に見えた赤レンガの建物の二階の小部屋にあり、仏文の授業はすべてこの部屋の長円形の大テーブルを囲んで行われていた。震災後、授業は十一月から開講されたが、しばらくは急造のバラックや他学部の焼け残りの教室をわたりあるかねばならなかった。

大正十四年(1925年)に渡辺一夫や伊吹武彦が卒業して以降、仏文科は毎年のように後の世に名を残す俊英を輩出している。東大仏文黄金時代の幕開けである。大正十五年にはフランス文学者として活躍する川口篤、杉捷夫、水野亮が、翌昭和二年にはジャーナリズム界で名を残す城戸又一が卒業する。そして昭和三年。小林秀雄、三好達治、今日出海、中島健蔵、平岡昇、田辺貞之助、淀野隆三……銚々たる面子が仏文を巣立っていく。

*

大正十四年から昭和三年にかけて在籍した小林秀雄については、数多くのエピソードが伝えられており、「仏文神話」の中核を形作っている。自他とも認める辰野の一番弟子だった小林は、研究と創作の発信源としての仏文像を最も象徴する存在であった。辰野と小林の師弟関係に憧れて仏文に身を投じた文学青年の数は、決して少なくない。

小林が学生時代からいかに抜きん出ていたかについては、たとえば鈴木信太郎が三十五年間におよぶ仏文教師の職を辞するにあたってこう書いている。

第一次欧州大戦後、フランス文学を研究する者が急に増え、ぞくぞくと本当の学究や作家を生じたが、誰が仏文第一の秀才か、と聞かれることが度々ある。私はいつも、小林秀雄が第一だと答えるのを習慣としている。小林は普段講義なんかには出て来ないが、試験には顔を出し、ある時の答案に「こんなくだらない問題には答えられねえ」と書いた。そこで私は零点をつけたが、翌年の試験の「マラルメ、類推の魔について」という問題には、如何なるフランスの文学者よりも立派な解説を書いた。私は「類推の魔」の本質について、完全に教えられて、すっかり敬服し、満点をつけた。そして去年の出題が愚劣であったことを一年振りて納得した。はなはだ鈍眼である。

(鈴木信太郎「教師冥利」)

学生時代の小林秀雄は、制服を持っていなかったのて、代わりにいつも同じ背広を着て、辰野からもらった(奪ったという説もある)赤い頑丈な靴をはいていた。

教室には時々出た。僕は翻訳と家庭教師で自活していたし、その上恋人を食わせる必要も無暗あやに出席などする暇はなかったのである。大学は人生の一部に過ぎぬ、という様な意見を別に抱いていたわけではないが、自然そういう生活を強いられていた。

(小林秀雄「僕の大学時代」)

文学好きの間ではよく知られているように、「恋人」とは親友中原中也から奪った長谷川泰子であり、家庭教師の教え子の一人が、当時高校生だった大岡昇平である。

小林の卒業論文は有名なランボー論であるが、それにはこんなエピソードがある。辰野は「あのような優れた論文を書き得る秀才だから、定めし、口答試験にも堂々と答弁するだろう」と期待していた。ところが、さすがの小林もフランス語の会話となると皆目ダメで、アンベルクロードによる口頭試問には黙り込んでしまった。辰野はその様子を次のように再現している。

「ランボーは何年に何処で生れたか」

「……………」

「君の論文はランボーではないか」

「……………」

「君はフランス語を話すか」

「然り……………非常に少し……………」

「ランボーの傑作は？」

「ランボー……………ランボー……………^{グラン・ポエト}大詩人……………」

(辰野隆「思い出」)

この頃の学生たちはというと、酒を飲んで盛んに議論を交わすことが多かったようだ。小林の一つ下の学年にいて、後にボードレールとヴァレリー研究の第一人者になる佐藤正彰の思い出に触れて、辰野がこんなことを書いている。

正彰君の学生時代の友だちは中島、今、小林、三好、淀野の諸君だったろう。仏文学以外では河上徹太郎君、学外では中原中也君ではなかったかと思う。何れも異色ある俊秀だった。しかも、誰も彼も例外なく酒客であった。その上、酒気を帯びたこの連中がまた例外なく卓厲風発の論客揃いで、酒臭い息を吐きながらの僻論逆説の交流は正に虹の如くであった。議論が熟して来るとなぐり合いがはじまる、そういう場面も兩三度目撃して、感心して、呆れたこともあった。

(辰野隆「若い友だち」)

教え子たちの無頼漢ぶりを呆れて見ている辰野だが、辰野自身も宴席では数々の語り草を残している。その一端を手っとり早く知るには、現在仏文研究室に置かれている「辰野先生最終講義」と題されたカセットテープを聞くといい。戦後に録音されたものだが、「最終講義」とは名ばかり、宴席での辰野が野太い声で次々とフランス語の歌を披露し、何やらがなりたてている。唐突に軍歌を熱唱しはじめたり、共産党をののしりはじめたりと、やりたい放題で、辰野はもちろん、みんなとても楽しそうだ。

さて、往時の酒の席での話には、他にもこんなエピソードを辰野が記している。

今は亡き山田珠樹が、嘗て——正彰君と健ちゃんが未だに仏文科の学生時分、或る夜、二人を赤坂の旗亭に連れていったことがあった。芸者二三人と、飲んで語って、歌っただけでは足りずに、正彰、健ちゃん二人は、はだか踊りを始め、床の間に上って踊り狂っている。山田は杯を含んで、悠然と眺めていると、やがて二人は山田に向かって、「やい、山田、お前も一緒に踊れ！」と厳命したそうである。翌日、山田と研究室で会うと、山田が、「仮りにも俺は彼奴等の先生だぜ。先生をつかまえて、やい、山田、踊れ、もないもんだ、ひどい野郎どもだ」と山田はしきりに面白がっていた。「それで、夫子はどうした」と訊ねると、スタンダリアン先生、にやにや笑いながら、「仕方がねえから、俺もはだかになって踊ったよ」

(辰野隆、前掲書)

ここで「健ちゃん」と呼ばれている中島健蔵は、小林秀雄らと一緒に卒業するが副手として研究室に残り、昭和八年(1933年)に助手になる。この頃の教師たちの顔ぶれは、教授に辰野隆、助教授に鈴木信太郎と山田珠樹、講師が豊島与志雄で、外国人教師は昭和七年にアンリ・アンベルクロードからピエール・アンベルクロードに変わっていた。ピエールもまた暁星中学に属する神父で、アンリとは親戚関係にあったようだ。

山田珠樹は、後に離婚するが森鷗外の娘茉莉の夫として知られる人物で、東京帝国大学附属図書館の司書官として震災後の図書館の復興に努め、その傍らでフランス小説史の授業を担当していた。昭和九年（1934年）に肺を患って休職し、二年後に退官、昭和十八年（1943年）に五十歳で命を落とした。

山田の後を継ぐのが中島健蔵で、辰野や鈴木からも生徒からも「ケンチ」と呼ばれて親しまれていた中島は、助手になった翌年の昭和九年から講師として授業を受け持つようになる。

この当時、辰野や鈴木はどのような生活を送っていたのだろうか。辰野はゴルフにのめり込んでいた。昭和八年（1933年）六月、赤羽にある学士会リンクを鈴木、山田と三人で訪れて以降、辰野はすっかりゴルフ狂となって連日赤羽へ通っていた。つきあいきれない鈴木と山田を尻目に、辰野は年に三百回近く通いつめたという。昭和十三年から十六年まで仏文に在籍していた作家中村真一郎が綴った次の回想からは、この頃の辰野の様子が想像できよう。

先生の冗談は江戸伝来のもので、お弟子の渡辺先生から、「毎日、ゴルフばかりしないで、もっと学生と接して下さい」と、忠告されると、「毎日とは何だ。ぼくは日曜の他には、月水金と火木土以外にはやっていないよ」といって、一座を唾然とさせるといった類のことが、しょっちゅうだった。

（中村真一郎『私の履歴書』）

辰野に続いて、一年ほどたってから今度は鈴木がゴルフに夢中になる。こちらは辰野に比べると「僕の方が不熱心で、年に一八〇回とは出掛けなかった」（鈴木「強制懺悔」）というから、だいたい二日に一回は通っていたようだ。こうものめり込めば、当然、授業にも影響は出るわけで、鈴木は午後にゴルフの練習時間を設けるために授業の時間割を変更した。この頃、鈴木は週に三コマの授業を担当していて、そのうちの二つは午後一時からはじまるものだったが、それを早朝八時からに変えた。そして十時に講義を終えると、そのまま赤羽のゴルフ場へ直行するのだった。

東大仏文科の基盤を築き、日本のフランス文学研究を大いに促進させた二人であったが、文学者の青白いイメージとはそぐわない日焼けした真っ黒な顔で講義をしていた。とはいえ、鈴木の場合が特にそうであったように、授業への姿勢は揺るぎないものだった。中村真一郎はこう記している。

大学に入って文学研究というものの実体に触れたのは、何よりも鈴木信太郎先生のマラルメ演習の時間だった。

ここで、一単位の二時間をたっぷり使って、先生はマラルメの十四行詩一篇のテキストの決定の手順を、私たちの見たこともない、凡ゆる種類の限定版をふくめてエデ

イションと、詩人の手書きの原稿の写真との照合によって、その句読点に至るまで実証的に追求し、それから一語ずつの解釈に入るのだが、それもまた、それぞれの話を、詩人の他の詩の中の同じ語の用例を集めて語意を決定し、あの表面的には朦朧としているように感じられるマラルメの詩から、明快な、そして唯一の正確な姿を浮き上らせる過程は、学問というものの厳密さを骨身に浸みとおらせてくれた。

(中村真一郎、前掲書)

他方、辰野の授業については、その名調子ぶりについていくつもの証言が残されている。時におおげさなジェスチャアまで交えながら、快活に熱弁をふるっていたようだ。辰野と鈴木の方法について、渡辺一夫がその違いを含めて次のようにまとめている。

故辰野隆先生は、「何でも好きなことを一所懸命にやれ。こんな面白いことがある。こんなふしぎなものがある」というような指導のされ方をした。これを受けて、鈴木先生は、「好きなことをやるのなら、こういう風にして調べるべきだし、それでは附け焼刃になる」という態度で我々に接しられた。

(渡辺一夫「鈴木信太郎先生のこと」)

豪放磊落で明るい辰野と、厳密な研究手法を体現する鈴木。この二人の絶妙のバランスが、黄金期の仏文科を盛り立てていた。

*

昭和十年(1935年)、太宰治が仏文科に入学してからすでに五年が経過していた。文学部が三年制だった当事、五年にわたって在籍し、しかもまったく姿を現さない太宰のことは、教師たちの間でもまれに話題になることがあった。その太宰が、昭和十年一月二十四日、井伏鱒二の紹介を通じて、檀一雄と二人で仏文研究室の中島健蔵のもとを訪ねてくる。

大学五年目の太宰は、この段階でまだ一単位も取得していなかった。当時の文学部は六年目まで在籍可能だったが、それも卒業試験に合格できなければ除籍されてしまう。卒業試験を受けるには二十一単位以上の修了が必要とされていた。太宰はどうしても卒業しなかった。周囲の人に卒業できそうだと嘘をついていた手前、除籍されるわけにはいかないのだった。

中島に会った太宰は、三人で近くの洋食屋、鉢の木へ行って夜九時まで会談した。太宰は自身がもう在学六年目で、ずっとぶらぶらしているばかりで切迫しているのだと称して中島の同情を引こうとした。ところが、ビールを飲んで酔ってくるうちに、檀も太宰もだんだん卒業の件がどうでもよくなってしまい、ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボー、

小林秀雄を肴に怪気炎を上げて、肝心の話は切り出せずに終わってしまった。中島も、太宰が卒業のための融通をしてもらいに来たのだとは知らず、「じゃ、またやってきたまえ」と言って二人と別れた。太宰はこれっきり姿を現さず、この年の九月、授業料未納の理由で東大を除籍される。こうして、辰野に憧れて進学してきた太宰こと津島修治は、結局仏文には少しもなじむことなく姿を消した。しかし作家としての太宰治の歩みは、ちょうどこの昭和十年頃から、徐々に着実なものとなっていくのだった。

*

黄金期の仏文を築き上げた辰野と鈴木の二頭体制は、辰野が東大を定年退職する昭和二十三年（1948年）まで続く。鈴木は昭和三十一年（1956年）に、二人のもとで育ち戦後の仏文の中核となった渡辺一夫は昭和三十七年（1962年）にそれぞれ定年退職している。辰野が退官する際にはぎやかだった。退官を記念する式では教え子代表の小林秀雄が名演説を披露して恩師を讃え、研究室では大饗宴が催された。宴会場と化した会議室では名うての酔いどれたちが大声を張り上げ、日夏耿之介は草履のままテーブルに乗って踊り、森有正は廊下に這いつくばってデカルトを罵った。およそ六十年前のこの日、仏文科は新しい時代を前にしてまばゆい青年の時に別れを告げようとしていた。若さへのそこはかかない名残りは怒声と哄笑にかき消され、宴は深夜まで続く。

<参考文献>

- 東京帝国大学編『東京帝国大学五十年史』 東京帝国大学 1932
辰野隆『辰野隆随想全集』（1）～（5） 福武書店 1983
出口裕弘『辰野隆 日仏の円形劇場』 新潮社 1999
鈴木信太郎『記憶の蜃気楼』 講談社文芸文庫 1991
渡辺一夫『白日夢』 毎日新聞社 1973
小林秀雄『新訂小林秀雄全集 第三巻 私小説論』 新潮社 1978
太宰治『晩年』 新潮文庫 1947
太宰治『走れメロス』 新潮文庫 1967
中村真一郎『私の履歴書』 ふらんす堂 1997
中島健蔵『回想の文学2 物情騒然の巻』 平凡社 1977

※ 引用に際しては、全て新かな新漢字に改めて表記した。